

深澤宏（ふかさわ・ひろし）先生



株式会社松竹撮影所 常務取締役

1959 年生まれ。

1982 年 松竹株式会社 入社。

テレビのプロデューサーを経て、映画のプロデューサーに。

職歴

テレビ部、映画製作部、松竹映像株式会社、映像企画部映画企画室長等を経て、現在、株式会社松竹撮影所 常務取締役。

「キネマの天地」(1986)、「男はつらいよ」シリーズ(1987～1995)、「学校」シリーズ(1993、1996、1998、2000)、「息子」(1991)、「虹をつかむ男」(1996)、「たそがれ清兵衛」(2002)、「隠し剣 鬼の爪」(2004)、「武士の一分」(2006)、「母べえ」(2008)、「おとうと」(2010)、「東京家族」(2013)、「小さいうち」(2014)など数多くの山田洋次監督作品を担当。他に栗山富夫、森崎東、本木克英、朝原雄三監督による「釣りバカ日誌」シリーズ(1988～1990、1994、2000～2009)、長尾啓司監督「アイドルを探せ」(1987)、久世光彦監督「自由な女神たち」(1987)、ジェームス三木監督「善人の条件」(1989)、滝田洋二郎監督「僕らはみんな生きている」(1993)、松原信吾監督「築地魚河岸三代目」(2008)、本木克英監督「超高速！参勤交代」(2014)などを手がけている。

賞歴、他

2003 年 日本映画テレビプロデューサー協会 エランドール賞 プロデューサー賞受賞。

2010 年 「釣りバカ日誌」シリーズにて日本映画テレビプロデューサー協会 エランドール賞特別賞を受賞。

第一回(2011)、第二回(2014)瀬戸内国際こども映画フェスティバル オリーブの島脚本賞審査員。

《講義概要》

プロデューサーとして山田洋次監督作品を始め数多くの映画製作に携わり、日本映画界の発展に貢献された株式会社松竹撮影所の深澤宏氏が日本映画の現状と未来と題して講義を行った。

講義ではまず、プロデューサーの仕事について話された。プロデューサーは映画の企画・製作・興行・配給の全てに関わる。日常生活の中で常にアンテナを張り、多角的に捉えた企画を立案・提案する「企画力」が求められる。また、通った企画は監督・脚本家・スタッフ・キャストの選定から取りまとめ、予算管理等をこなす「現場力」が必要となると話された。

映画の作り方については、映画の企画、製作、興行から公開について詳細に話された。1980年代以降、TV局等が映画製作に参入するようになり、映画会社単体での製作から、複数の企業が集まりリスクヘッジを含め協業しながら映画製作を行う「製作委員会」方式へと変わってきた。TV局が映画製作に参入することにより、ドラマ等の事前の認知率が高い映画の制作が行われるようになり、公開前の映画宣伝を効果的に行うことが出来、高い興収を見込めるようになった。但し、TV局が入る場合にはテレビで放映できる作品であることが前提となる。一方、そうでない場合には企画の自由度は広がる。いずれにせよ、製作する場合には、原作・監督・出演者等の「認知度」と“見に行きたい”と思う「意欲度」の両方が高い企画が求められる。その為、近年ではマーケティングを大変重要視している。宣伝もそれに基づいて宣伝をしてゆく。

日本の映画市場は、景気や世間の動向に大きく左右されることなく、安定して2000億円の規模を誇る。2013年の邦画映画興行収入のうち、実写映画は4本しかランクインせず、アニメが大半を占めた。日本国内での実写映画は、欧米のグローバル展開される映画とは異なるが、国際映画祭への出品や海外でのリメイク等によって海外で認知され展開が進んできている。

今後の取り組みとして、海外で公開できる映画を制作していかなければならないと述べられた。映画館で映画を観る楽しさとは、大きなスクリーンで見るだけでなく、多くの人と同じ環境の中で、哀楽を共有することである。今後、映画を独立メディアとして捉えるため、ターゲット別に細分化しつつ、人々に映画を劇場で見に来てもらえるように映画業界は努力していかなければならない。映画の未来について、楽観視はしていないが、悲観のみでもない。是非、映画館に足を運んで欲しいと述べ、講義を終えられた。

